

聴く側にフォーカスした ピアレビューシステムで、 プレゼンスキルの向上に成功

研究者として欠かせないスキルのひとつであるプレゼンテーション能力。中川講師はその実習授業において Moodle を利用したピアレビューシステムを構築することで、他人の発表を能動的に聴くことを促した結果、そのスキル向上に大きな改善効果をあげている。



中川 剣人
スポーツ科学学術院 講師



他人の発表を能動的に 聴かざるを得ない仕組みを作る

スポーツ科学研究科修士課程 1 年生の必修科目として設置されているこの授業は、スポーツ科学研究の基礎を身に着け、研究者とのコミュニケーションを円滑に行う技術の習得を目指している。授業では、教員によるプレゼンテーション技術に関する講義やデモに加えて、学生が自らの研究や関連するトピックを紹介するプレゼンテーションの演習も 3 回実践している。

中川講師がこの授業を担当した初年度の 2019 年度の演習部分は、テーマを与えてプレゼンをさせ、その場で質疑応答を行うというシンプルな形で行った。「結果的には、授業を通じたプレゼンスキルの改善があまり感じられず、事前の講義やデモ、質疑応答時の教員からのコメントだけでは不十分なのだと反省しました」。

他人の発表を真剣に聴いていない学生がいた点も気になった。「そのせいもあり、質疑応答もあまり盛り上がりませんでした。聴いた内容に応じた質問やコメントを考えるのも必要なスキルです。聴衆側の学生にもっと能動的に聴くことを促して、質問や建設的な発言ができる力を養う必要性を感じました」。また、一般的に授業内でプレゼンのフィードバックや個別指導を受ける機会は少なく、発表者のプレゼンスキル向上に効果的な方法を模索していた。

そこで導入したのが、Moodle を介したピアレビューによる相互評価システムの構築だ。発表者はプレゼンで使う資料を事前にアップロードして全員が見られるように共有しておく。「アップロードが授業の直前となることも多いので、他の学生はざっと目を通す程度にはなりますが、手元に資料があることでメモが取りやすく、発表内容の振り返りもしやすいというメリットもありました」。

Moodle を使って全員分の フィードバックシートを提出させる

授業内の発表時には、どの学生も 1 日に 1 回は質疑応答に参

加することをノルマとして課した。さらに、発表を聴いて感じたことを教員側で用意したフィードバックシートに記入させる。シートには「文字ばかりのスライドではない」「シンプルな文章である」などスライドの見やすさ、「論理的な展開である」など発表の内容、「声が聞き取りやすい」など発表態度、そして「内容がよく理解できた」などの質問を 12 項目用意し、それぞれ 3 段階で評価してもらった。「その他のアドバイスやコメントなど、文章による自由記述欄も設け、特にそこをしっかりと書くように指示しました」。学生は授業終了後 3 日以内にこのシートを Moodle を通じて提出する。「フィードバックシートの内容は平常点の対象となることを周知し、他人の発表をしっかりと聴かざるを得ない状況にするという設計です。フィードバックシートを見て、明らかにきちんと聴いてなかったと感じられる場合には、個別に注意するコメントを送ることもありました」。

教員は提出されたシートを確認して整理し、その内容を各発表者に Moodle を通じて送信する。これにより、発表者は教員だけでなく受講生全員からのフィードバックを得られることになる。さらに、フィードバックシートに寄せられたコメントや質問のうち特に重要だと教員が判断したもの、および授業時間内の質疑応答で答えきれなかった内容について、それに対する回答を Moodle の BBS に投稿することを、発表者への発表後の宿題とした。発表時に教員が不十分だと感じて追加の調査を課す場合もあり、それも BBS で回答することとした。

「質疑応答時やフィードバックシート上で質問しっぱなしで終わってしまうと、聴いている側の解決にならずよくありません。発表者にとっても、どんな質問にもきちんと答えようとする訓練が有効だと考えました」。

2022 年度からこの BBS を使い始めたところ、自宅で時間をかけて冷静に対処できるため、自分の論理をじっくり整理できるという効果も感じられた。

教員からはこれとは別に、発表者の資料にコメントをつけた直接フィードバックも行っている。「こちらは体裁や文章表現、図表表現など細かい点が多いです。必要に応じて、論理展開の不備や良かったことの指摘もありますが、発表内容のうちの専門的すぎることなど、特に他の学生にシェアする必要性が低いことは、

こちらで扱います。基本的には教場でのやりとりをメインにしたのですが、時間の制約もあるので、個別の細かいフィードバックは Moodle を使っています」。

教員からの助言で気をつけている点は、良くないと思う点はなるべく具体的に指摘することだ。「ちょっとまずいな、直したほうがいいなと感じたところは、どこがどう良くないのかを説明することを重要視していました」。

オンラインで冷静に考える時間と、対面での緊張感あるやりとりとの好バランス

このように、教員とクラスメイトからの充実したフィードバックの結果、プレゼンの内容は回を追うごとに明らかに改善し、3 回目の発表では満点に近い点数を獲得した学生も見られた。「フィードバックでさまざまな指摘を受けて、次はそこを指摘されないように修正できていた学生が多かったです。フィードバックシートの 3 段階評価の点数の合計点だけ見ても数字は良くなっていますが、私から見た主観的な印象としてもそれ以上に上達が感じられました。スライドの作り方も発表の仕方も、2 回目、3 回目と良くなっていましたね」。

それぞれの学生は自分の研究室でもプレゼンを行う機会はあるが、その場で褒められたという声も聞かれた。「授業での学習効果を研究の場面でも活かしてもらえたのはうれしいです。学生にとって負担は小さくなったと思いますが、プレゼンスキルは研究だけでなく就活や社会に出てからも必要になるケースが多いだけに、意欲を持って取り組んでくれたようです」。

必要に迫られてしっかりと聴くようになったことで質疑応答での発言も増え、その結果授業時間がオーバーしてしまうこともあるほどだった。「特にスポーツ科学学術院は文系から自然科学までとても幅広い分野の学生が集まっています。普通大学院では研究室の垣根を超えた横のつながりはあまりないと思うのですが、このクラスではそんな多様な専門を持つ学生が活発に意見交換できたことで、学生同士が仲良くなっていった感じがあったので、それも良かったですね」。

ピアレビューについては、2019 年度の後半頃から紙に書

かせる形式で取り入れていた中川講師。「2020 年度からは旧 Course N@vi から Moodle に全面移行したことに加えて、コロナ禍でオンライン授業となったこともあり、どうせなら Moodle を使ってシステム化しようと考えました」。

課題提出も、フィードバックや BBS のやりとりすべてを Moodle を通じて行うシステムを作っておいたことで、全面オンライン授業となった際も、教室と ZOOM のハイブリッドになったときも、問題なく授業を続けることができた。

「完全に対面の授業に戻っても、自宅でじっくり整理した上で文章化してオンラインで行うやり取りと、教室に集まって対面での緊張感を持ちながらの即興的なやり取りと、両者が良いバランスを保てたことも効果的だったと思います」。

他大学での授業経験もある中川講師だが、早稲田は ICT ツールが充実していると感じている。「Moodle をはじめ、いろいろなシステムを使えるのはとてもありがたいですね」。

このピアレビューシステムをうまく機能させるためのポイントを尋ねると、「発表する側にばかり目が行きがちですが、聴いている学生にどうアプローチするか。そこに注目した施策が大事なのだと感じました」。

ピアレビューは多くの視点からの助言を得られることで発表者にとってプラスになるだけではなく、評価する立場にとっても、他人の発表を聴いて評価するのは自分自身への気づきにもつながる。ICT を活用してシステムを作ることで、そんな相乗効果を生み出すことができたといえるだろう。「この授業でうまく機能する手応えを得られたので、学部の授業でも、プレゼンをしてもらうときは、もう少し簡易的ではありますが、このような相互フィードバックを取り入れており、特に聴衆側の集中力維持に効果を感じています」。